

この検査が極めて有効であった症例についても報告する。

12) 進行胃癌における術中ダグラス窩洗浄細胞診の臨床的意義と必要性

南村 哲司・小林 浩司
梨本 篤・佐々木寿英
加藤 清・佐野 宗明
筒井 光広・土屋 嘉昭 (県立がんセンター)
牧野 春彦 (新潟病院外科)

〔目的〕洗浄細胞診の臨床的意義と、術中 CDDP の腹腔内投与の臨床効果について検討した。

〔対象〕1991年末までの4年間に手術を施行したS(+)の進行胃癌385例中、洗浄細胞診施行例は254例である。class IV V を陽性とした。

〔結果〕①洗浄細胞診の陽性率は23.2% (59例)で、全てS2 (27/156), S3 (32/76)の症例であった。②洗浄細胞診のP診断に対する accuracy 83.9%, specificity 92.3%, sensitivity 62.5%で、陽性率はPO 7.7%, P1 48.4%, P2 64.0%, P3 87.5%であった。③POで細胞診陽性の13例では、9例に腹膜再発を確認し50%生存期間は24ヶ月で陰性例136例の42ヶ月と比べ有意に短かった(P=0.026)。④P(+)または細胞診陽性例の50%生存期間は、有意差はないが術中CDDPにより未分化型で延長した。

〔結論〕1. S2以上の進行胃癌に対してはP因子の肉眼診断に加えて、洗浄細胞診を施行する意義が認められた。2. P(-)症例でも細胞診陽性例はP(+)として扱うべきである。

II. 特別講演

みなし児ウイルスから

パピローマウイルス 5b型まで

岡山大学医学部附属分子細胞
医学研究施設長教授

矢部 芳郎 先生

第14回新潟てんかん懇話会

日 時 平成4年11月28日(土)
午後2時30分～6時30分

会 場 新潟大学医学部有壬記念館
2F

I. 一般演題

1) てんかんの Magnetic Resonance Spectroscopy

渡辺 浩之・桑原 武夫 (新潟大学脳研究所)
辻 省次 (神経内科)
大久保真樹・伊藤 猛
酒井 邦夫 (同 放射線科)

目的：近年、臨床用装置でも生体の特定領域から生化学情報を無侵襲的に得ることができるMagnetic Resonance Spectroscopy (MRS)が可能となった。今回我々は部分てんかんの症例で¹H-MRSを検討したので報告する。

症例：16才の男性。6才時右手の震えがあり、てんかんと診断された。7才時に全身痙攣発作が出現。8才時、軽い右麻痺と頭部CTで左脳半球の萎縮を認めたが、頸動脈造影・脳シンチ・アミノ酸は正常。その後内服治療でも、時々右下肢に始まり全般化する痙攣発作を認めた。

'92年の発作間欠期の脳波で、左前頭葉優位に2Hz程度のspike & waveを認め、CTでは前頭葉優位に左大脳半球の萎縮を認めた。MRI・T₂強調画像にて左側脳室の前・後方と半卵円中心に軽度の高信号域を認めた。¹²³I-IMP-SPECTでは、左大脳半球全体に血流の低下を認めた。

方法：MR装置はSiemens 1.5Tで、head coilを用い、STEAM法にて関心領域(VOI)の局在化を行った。TEは270 msec、加算は256回で、両側前頭頂葉に3.5 cm立方のVOIを設定した。

結果：健側に比べ患側では、NAA/クレアチン比は約半分に減少し、乳酸・脂肪のpeakが認められた。

考察：NAAはNeuronに特異的に含まれるためその障害が示唆され、これは過去の報告と一致する。乳酸に関して過去の報告で一定の見解はない。部分てんかん症例のPETおよびSPECTでは発作間欠期では脳代謝・血流の低下が、発作中は焦点部の脳血流、糖代謝率の亢進が報告されている。我々の¹³C-MRSを用いた動物実験でも発作中の糖代謝亢進と嫌気性解糖による乳酸の産生が認められている。本例においてSPECTでは血流低下を認めている。本例においてSPECTでは血流